

共働き女教師の記録

—教師として母として妻として—

井伊磯子

著者略歴

愛媛県出身

愛媛師範学校卒業

昭和21年卒業以来中学校勤務

愛媛県伊予市立伊予中学校勤務を経て

現在 愛媛県宮内小学校教頭

共働き女教師の記録

—教師として母として妻として—

昭和五十三年十一月二十日 第一刷発行 八〇〇円

著者

井 伊 磯 子

発行者

石 澤 三 郎

発行所

株式会社 栄光出版社

〒一四〇 東京都品川区東品川一—三七—五

電話 東京 (四七二) 一 二 三 五 (代)

振替 東 京 七 一 六 二 三 五 〇

印刷 江戸川印刷所
製本 田中製本印刷

共働き女教師の記録

——教師として母として妻として——

はしがき

女教師・女の先生・女教員・女子教員・おなごの先生・婦人教師など、私たち女ということいろいろな呼び名で呼ばれる。ただ女というだけですでにハンディキャップがあるように思えてならない。

また、共働きの場合、教師であり、母であり、妻であり、主婦であり、嫁であるという三重四重の負担がのしかかっている。しかも、これら女教師が全国的にみて、小学校では半数以上に、中学校でも三〇パーセント近くを占めているという。次第に女教師の占める割合が高くなっていく。つまり、小中学校の教育の担い手が女教師になりつつあるということである。

教育——人間づくり——という大切な仕事、しかも、その基盤を培う義務教育を背負っている。共働きの、男だの、女だのといっている次元ではない。次代を担う児童生徒にとって、義務教育というかけがえのない機会として与えられている期間である。私は、そういう自覚に立って共働き女教師として出発して二十年になった。いかに意識していても、教師として、母として、妻としての道はなかなか厳しいものである。これは、その間の私のささやかな生きざまを

まとめたものである。自己反省や後悔や迷いや祈念や喜びや感謝の交錯する記録である。

こうした自分の姿を客観的に見つめ、これからあとの生き方の一つのしるべにしたい。また、母親としてささやかな子どもへのプレゼントでもある。また一つは、たくさんの共働きの人へ、女としてのささやかな私の提言でもある。あと残り少ない教師の生活を教育者という呼び名で呼ばれるよう、いや自分で思うことのできるような生き方をしたいと念じている。

出版にあたって、もう二十年来交友を温めていただき尊敬している広田中学校長白形重男先生、大成小学校長水口清一先生に格別のご指導をいただいた。また、現任校（伊予中学校）の橘修校長、岡野哲教頭をはじめ同僚から温かい励ましを受け支えていただいた。特に恩師であり、心から尊敬している田名後敬先生に題字を、同僚の黒田峯先生には、カットを書いていただいた。こういう多くの方々に心から感謝の意を表したい。

昭和五十一年十一月

井伊 磯子

目次

はしがき.....	3
一、共働き女教師としての出発	
目と目.....	11
愛の郵便屋さん.....	13
共働き女教師誕生.....	17
二、共働き育児(一) ―成長を祈って―	
長子誕生.....	21
母乳と仕事.....	25
五まい一よう.....	28
お守りさんやーい.....	32
五右衛門風呂.....	49
やっちゃんごめんね.....	55
かあちゃんばかね.....	57
子どもが病気になったとき.....	61

三、共働き育児(二) ― 躰を中心にして―

紺屋の白袴……………71

はっけよい、のこった……………75

親ばか……………79

こうして子どもに読書を……………87

共働き育児も楽し……………93

四、共働きの母として―子どもに何をしてやればよいか―

P T A とかけて……………105

健康管理と体力づくり……………109

母と子の絆……………117

母のこと……………120

あんちゃんのこと、戦争のこと……………125

ワタシ チュウゴクヒト……………136

五、共働きの楽しさ

ありがとう……………143

共働きの日々……………148

両立への道	152
六、子どもを注意する（叱る）とき	
いちばん腹の立つことは	157
Iのこと	163
YとKとTと	166
七、教師として―心に残っている授業―	177
八、ぎりぎりに追いつめられたとき	
窮地におちいる	193
身からでたさび	196
わが道を行かん	199
九、病気―自分で直すもの直せるもの―	
突然 ある夜	207
更年期障害	211
倒れて後己む	215

十、共働きの妻として

母は弱く妻は強し.....221

すみません.....227

初心にかえる.....229

題字・田名後敬
カット・黒田映

共働き女教師の記録

——教師として母として妻として——

一 共働き女教師としての出発

目と目

いくつかの縁談をなんとなく見送っている間に、三十歳近くなった。そのころ、故人になられた先輩から、ある仕事を勧められていた。私の好きな仕事であったが、私は、迷わず辞退した。教師として生きたい。そして、家庭を持ち、子どもを生んで育てたい。そうしたら、教師としての仕事も充実するのではなからうか。そんなことを真剣に考えているころ、私が出勤し、帰る姿をいつも追う目があった。朝、あわただしく、焼きいもをほうばりながら出勤するときも、ちくわをかじりながら帰るときも、その目は、私を捕らえていた。

その人は、学校を卒業して、電力会社に勤めて二年目に肺結核にかかり、自宅療養をしていた。そのころ（昭和二十五、六年）は、パスとか、マイシンとかは使われていなかった。それに田舎では、結核といえば不治の病で、年寄りには、遺伝するおそろしい病気のように考えている人も多かった。その人の家は平地に、私の家は小高いところにある。私が出勤するとき通る道と、その人の家の横を通っている道は、平行に、三百メートルばかりのところでYの字型で一緒にな

っている。

田舎の狭い道で、ほとんど人にもあわない。誰が歩いているかすぐわかる。私が家を出て平行になっている道を歩くとき、私は、その人の視線を感じながら、素知らぬふうに、さっさと急ぎ足で歩いた。ときには、自転車とばして、あつという間に過ぎることもあった。

その人の妹さんとは、親しくしていた。四キロメートルもある隣の町まで、よく映画を観に行った。ある日も、どしゃぶりの雨の中をぬれて「アンナ・カレーニナ」を観に行った。感動にうたれて帰った。その翌日、私は、病めるその人に、文庫本の「アンナ・カレーニナ」を貸した。その本の間に、「キリスト教的人類愛に生きたトルストイが、美しく、教養のあるアンナをなぜ轢死させたのか」というような意味のことを一筆認めてはさんでおいた。やがて、その本とともに、返事が返ってきた。内容は今は記憶していない。

ますますその人の目は、私の姿を朝夕確実に捕らえていた。雨の降る日は、西の戸が開いていて、それとわかった。夕方、ときとして私が遅かったり、早かったりしたときは、たぶん長い時間、同じ道を眺めていたであろうと想像できた。しかし、私は、依然として、その視線に反応せず、まっすぐ前を見てせっせと歩いていた。私は、若かったし、毎日、元気で働けるという好条件で、まだ人の心の機微を感じることができなかった。つまらない優越感のようなものもあったように思う。

愛の郵便屋さん

その人に対して、同情の気持ちと、やはり以心伝心、その人の気持ちが私にもわかってきた。いろいろの本を交換して読んだ。その本を必ず新聞紙に包んで糊づけした。その中には、その本の感想などをどちらも必ず一筆認めて入れていた。

その郵便屋さんは、彼のほうから来るときは、かねがね、土地の人々も、私も尊敬していた人、彼の父親であった。私の小高い家まで、杖をつき、幾十回通っていたことか。私がいけないときも多い。愛の郵便屋さんは、誠実な実直な人柄そのままに、いつも、「これを持って参りました」

といって、ていねいに渡され、そそくさと立ち去られたお心は、今、察するにあまりある。療養中の息子の愛の花を咲かせてやりたいと、親として思われたにちがいない。いつ治癒するともわからぬわが子の青春を思い、郵便屋を引き受けることで、気持ちを満たしてやりたいとも思われたであろう。ラシャの帽子を深々とかぶり、色つきのめがねをかけ、袖なし綿入れ半てん（「ぼんし」と言っていた）を着て、その上をひもでしめて、杖をついて歩かれていた。愛の郵便屋さんの姿を私は、忘れることはない。

この愛の郵便屋さんを、私は、おとうさんと呼ぶことになる。みんなから「喜盛先生」といつて慕われ、尊敬された人である。私も舅と嫁という関係で生活してみても、その人格に触れ、いっ

そう尊敬の念を深くした。人として、教師として、母として、嫁としての生き方を私は学びとった。今、あらためて、故人になった父の冥福を祈りながら回想にふける。

それから、いろいろの本を交換して読んだ。私のほうからの郵便屋さんは、妹であった。いちばん下の妹とは、二十歳近くも年令差がある。その小さい妹が、たよりない郵便屋さんだった。おやつをやったり、どこかへ連れていく約束をしたりして郵税を払った。ときに、機嫌をそこねるようなことをすると、

「もう、行ってあげんけん」

というのであった。

こうして、一年近く相当に読書量もふえたし、自然に私の心情も変化した。愛情の芽が育ち、ふくらんでいった。ふしぎなもので、そうなるにつれて私は悩んだ。すでに数年も療養生活をしている彼が、どんな病状なのか。みかけは、いかにもよさそうに見えるが、果たして、いつ全快するかわからない。それに、私には、心を寄せている人がないでもなかった。悩みは深刻になってきた。決断を迫られるところまでになった。しかし、私は、落ちついて決断することができた。

すぐ下の妹とは、二歳違いで小さい時からいつも一緒に生活した。一緒に寝て、一緒に勉強して、一緒に働いた。私が姉であるのに、少々、癪の強い私は、妹にたしなめられ、暖かく包んでくれた記憶がいっぱいある。その妹が、私たちのことを一生懸命考えてくれた。父母も説得して

くれたし、私の気持ちも支えてくれた。妹も、結核にかかり、教員生活僅かで退職した。肺切除という手術を受けて、療養所での生活も経験している。この妹もまた、愛の郵便屋さんであった。

昭和二十四、五年ころは、いっしょに勤めていた同僚もかなり多く結核で倒れた。戦時中の学徒動員や、食料不足などが影響していると思う。お国のためにと、からだを張って尽くし、耐乏生活の中でがんばってきた若者の中の一人である彼を見捨てることはできない。同情と愛情をいっしょにしたような気持ちだった。

やはり、昭和二十四年ころ、私も肺門浸潤になり、かなり長い間床についた。その時、仕えていた河野健一校長先生は、私の教師としての基礎を培っていただいた先生だった。九年間仕え、その実直な、真実、教育を考えられ、部下や生徒のことを思ってくださいる人柄に接してきた。学問の造詣も深く、心から尊敬している。その先生に、私の休んだ期間、私が担当していた教科（国語）を代教していただいた。家で療養をしていたので、家まで見舞いに来ていただいた。そのときも、

「西山さん（旧姓）。おかげで、ぼくは、新字体や送りがなも勉強できてよかった。藏という字も藏になったんじゃないあ」

と、こんな話だけをして帰られた。私は、こういったお言葉に、どれだけ慰められ、励まされた